

# 第6回風景デザインサロン●開催レポート

## 第6回風景デザインサロンの実施状況

去る平成20年3月4日(火)に、福岡市薬院にて、第6回風景デザインサロンを開催しました。

- 講師：十時 裕氏(株アーバンデザインコンサルタント取締役社長)  
アシスタント：山田氏、山本氏
- テーマ：「市民ワークショップのテクニック」
- 開催時間・場所：18:30~21:00 / I CONE (福岡市薬院)
- 参加人数：17名

第6回目のサロンでは、年間200回以上のワークショップを担当されている十時さんにその会場設定や進め方のテクニック、考え方をお話頂きました。



第6回風景デザインサロンの開催です

## 講演内容の骨子

### 1. 講演の趣旨について

従来は会議・説明会等の一方通行型コミュニケーションが主で、事業等の発意から決定までの時間は短かったが、事業における反対運動などで事業に至るまでの時間が長くなり、相当のエネルギーを消耗していた。そうした反省から発意から決定までの時間は長い、決定後は事業までの時間が短く、満足度の高いワークショップ(参加型)による双方向型コミュニケーションが採用されるようになってきた。本講演では、ワークショップを用いてどういうことを実施しているのか、またその構成や流れ、構成の注意事項について事例を通して説明し、意見交換を行う。

### 2. ワークショップの今日的動向

ワークショップの活用モデルとしては、以下のモデルがあり、従来は①や②の会議、説明型がメインであったが、今日は④がメインとなっており、また、組織をつくりながら②、③を行っている。

- ①研修ワークショップ(地域リーダー育成講座、まちづくり専門家養成講座など)
- ②プランニングワークショップ(総合計画、都市計画、マスタープラン策定、コミュニティー、校区のまちづくり計画策定など)
- ③デザイン(プロジェクト)ワークショップ(公園、道路整備の計画策定、区画整理、景観形成のための土地利用、施設配置計画など)
- ④地域構築(マネージメント)・自律ワークショップ(地域コミュニティ活動の運営強化、地域組織の主体的な計画事業への参画、協働など)

### 3. 市民的ワークショップの紹介とワークショップモデル

市民参加のまちづくりのポイントとして、グループ分けなどワークショップのやり方の説明、ワークショップの目的、ファシリテータの役割、参加者をその気にさせる5つの“合う”、ワークショップの回数(4回程度)、期間(6ヶ月程度)の説明があり、それに基づいた以下のモデル紹介があった。

- ・校区まちづくり(小学校の例)
- ・公園改修プランワークショップ(住吉公園)

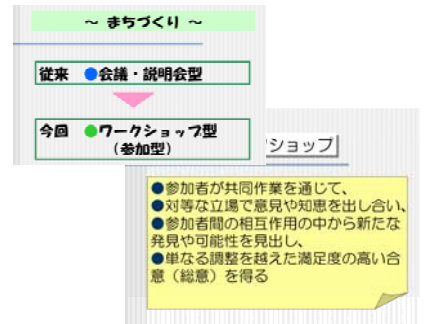
また、ワークショップとは… 対話と体験型のグループ学習・合意形成手法であり、水先案内人、そそのかし役、触媒としてのファシリテータの役割が重要である。

### 4. 事例紹介

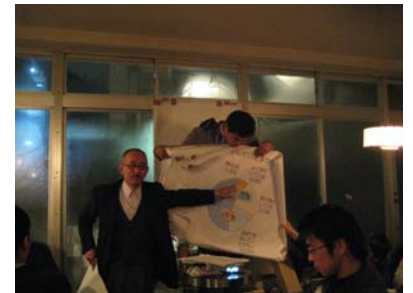
事例紹介では以下の2例の紹介があった。

- ・久留米駅西口まちづくり  
久留米の新しい玄関口としての構想を、以下の4回のワークショップで実施し、最後にパンフレットを作成し、まちづくり実験イベントを行った。  
「まち歩き」「現状と課題」「将来像」「イベントの企画」
- ・竹田本町通り

現道拡幅計画において、歩行者空間の確保と城下町の景観確保の観点から2回のワークショップを開催した。最初にVRを作成し、まちづくりのイメージを提示してから検討を進め、計画幅員の縮小、昔の建物を残す線形検討、まち並を壊さないルート計画等を行い、将来の通りのイメージとルール作りを提示した。



### ワークショップのポイント



熱心にご説明いただきました

平成18年8月24日	小学生ワークショップ	委員会
平成18年10月13日	第1回「まち歩き」	委員会
平成18年12月10日	第2回「現状と課題」	委員会
平成19年1月21日	第3回「将来像」	委員会
平成19年2月4日	第4回「イベントの企画」	委員会
平成19年2月25日	まちづくり実験イベント(常盤川公園内)	委員会



### ワークショップ事例

## 質疑応答

十時氏の熱心なご講演の後、質疑応答の時間を設けて意見交換をしました。風景デザイン研究会の会員メンバーをはじめ学生さんなどから、時間が足りなくなるほどの多くの質問や感想をいただきました。主な質疑応答は以下のとおりです。

- 1) (質問) コミュニティについて傾向がありますか？  
(回答) 行政区があり、区長さんが行政からお金を貰っており、行政の下請けになっている。田舎になればなるほど不便だけど結びつきが強く、満足度が高い。都会はNPO等の支援型が増え、便利になればなるほど満足度が低い。
- 2) (質問) ワークショップの参加者の熱意について、モチベーションを持たせるためにどのような工夫をされていますか？  
(回答) 若い人（大学生が良い）を入れる。お世話役をつける（言いたいことを封じ込めるのではなく、思いを伝えてあげる）。
- 3) (質問) 参加者に2種類あって、意見を言う人は一杯いるがなかなかまとまらない、また、まとめることのできる人が少ない場合、どのような対応をすれば良いか？  
(回答) まとめるのはファシリテータの仕事。参加者がまとめるのではない。意識のある人がいると意思決定の時に有効になる。
- 4) (質問) 2～3年のワークショップの時、だんだん人が減ってくる。新しい人を入れるとき、今までの流れを大切にやって行きたいが、どういう形でやって行ったら良いか？  
(回答) 外に向けての情報発信が少なく、自分たちの自己満足でやっているのではないか。義務感でやっている人が多く、ミッションが不足しているのではないか。
- 5) (質問) 地域活動が何かということが理解されていない状況の中で、ある場所を整備することになり（例えば公園の維持管理）、ワークショップをやるときに、自分に影響の度合いが多い（利害の度合いが高い）人が多く参加する。周辺の人の思いを汲み取りたいときはどうすれば良いか？  
(回答) まづは直接影響の度合いの多い人の意見をみんな尊重する。周辺の人は別途に扱うような気持ちにならなければならない。  
(質問) 参加していない人の意見をどう考えるべきか？  
(回答) 来ていないという意思表示でしかない。来ていない人にも情報を出して意見を貰う工夫も必要。（直接参加の代替えとしてアンケート等で補足することも必要）
- 6) (質問) ワークショップが進化する方向性を教えて欲しい？  
(回答) 協働のまちづくり、自治につながっていく。犯罪や家庭の崩壊をカバーし、地域力を高めるときに人と人を結びつける仕組みとしてワークショップ的発想（人が集まり掛け合わせる）の仕組みが必要である。
- 7) (質問) 発注者と住民との間に温度差があるとき、発注者の意向に沿わなければならないというジレンマが良くある。そういった場合、どのように解決されたか事例があれば教えて欲しい？  
(回答) 発注形態が合わない。アドバイザー的業務として、アドバイスしてできたものを結果にしないといけないのではないか。ズレを早めに見極め、行政と住民の間で話し合い、修正する必要がある。  
行政が意向を持っているときは、始める前に充分打合せて、読みをはっきりしてスタートすることが大事。ズレがあるときは協議して、2つぐらいのミッションを持っていないといけない。発注者をパートナーと思って一緒に企画したり、何らかの役割を与えて参加して貰うことも必要。
- 8) (質問) 京畿かいわいめぐりで、ワークショップのプランニングを4回やり、5回目にディベートを組み込んでいるが、どの段階で位置付けしたのか。また、主体が少し変遷してくると思うが、どういうふうに関わり、どのように距離を置いたか教えて欲しい？  
(回答) 目標が無い限り、このままワークショップで終わる可能性があり、関係した人たちが最後に盛り上がる場として、直感で5回目（まちづくり実験イベント）を入れた方が良いと思って提案した。ただ、ワークショップや委員会の中で、やれたらやりましょうという発信はしていた。  
(質問) 4回目と5回目は違う感じなのか、流れでそうなったのか？  
(回答) 3回目までで、良いことをやっているとの認識が出来、4回目の最後のワークショップのとき、希望者を集めて貰ったら普通のワークショップと同じ人数が集まった。積極的な人が一人いたが、その人の指示で動いたということの無いように、皆で情報を共有化し、参加者が主体で動くような形で進めた。
- 9) (質問) 公園維持管理のワークショップで、参加者と利用者が違う場合、実態が反映されないのではないかと？



参加者も体験しながら聞きました

(回答) 意思決定の二重構造は避ける。当事者意識を持って、自分が参加者を集めるぐらいの責任感と意欲が必要。集まった人だけでやるというのは今後難しい。地域の人に集めて貰うという方法もある。(住民から住民に伝えて貰うことが押しつけにならずに有効)

10) (質問) ファシリテータとしての役割で、

Q1 : 市民が自立してやって行くときどこで引けばよいか?

Q2 : この10年でファシリテータの役割がカリスマ派から庶民派に変わってきていると感じるが、十時氏の考えるファシリテータ像は?

(回答) A1 : 相手が要らないという雰囲気(サイン)を感じる時。それが出来ないとファシリテータとして能力不足と思う。

A2 : いろんなことを考え、いろんなことを用意する(道具立てを用意する)。地域の人は絶対に答えを出せると信じる。答えを出すときは煮詰まってから選択する。

11) (質問) 仕事を続けてきてこういうのが良かったと思ったことをお聞かせ下さい。

(回答) アメリカで建築を主にしている、その後都市社会学を学ぶときにこういうアカウントケアの世界があることを知り強烈な経験をした。日本には環境設計や都市デザインという言葉がなかったが、こういう時代がくると思いやってきたので、何も悩んだことが無い、全てがおもしろかった。

12) (質問) ファシリテータをやってみたいという人があった時に、ファシリテータはこういう人が向きとかこういうことを心がけているということがありますか?

(回答) 住民の目から見ても行政は中立になれないので、ファシリテータになれない。好き嫌いが無くどんな人にも関心を持つ。いろんなことを捉えて構造化する力がある(問題の本質を知っておくことが必要)。人を指示する、コントロールしようという考えは不可。人の力を引き出して束ねてやる力が必要。相手が作ってきたものをまとめることに喜びを感じる必要がある。信頼がある。参加者に充実感を与え、喜びを与える人。

13) (質問) まち歩きで広範囲になった時、どういうポイント絞って歩いて貰っているのか、またもっと広範囲になった時に、まち歩きに変わるものとしてどういう道具立てをされているのか?

(回答) 1時間以上は歩けないので約1.5km~2km以内、事前に見て貰いたいところを絞らないと広い範囲は無理。さらに広くなった場合はポイントを絞り、グループ分けと併用してバスで回るという方法もあるし、スライドを撮ってきて見るという方法もある。まち歩きしたときの言葉が一番使い勝手が良い。